筑後地方南部における黄檗派寺院の本堂形式とその変遷

SOME TYPES OF THE MAIN BUILDING OF OBAKU-SECT BUDDHIST TEMPLES IN SOUTHERN PARTS OF CHIKUGO DISTRICT AND HISTORICAL TRANSITION OF THESE TYPES

山本輝雄*

Teruo YAMAMOTO

This report is a study on some types of the main building of Obaku-sect Buddhist temples in southern parts of Chikugo district and historical transition of these types in Edo-period. In this district at first Daiyuhoden in Fukugonji temple was built in 1674. And a model of this building was Daiyuhoden (built in 1669) in Mampukuji temple which is a center of Obaku-sect temples all over Japan. There were the main buildings having no floor adopted from the age earlier than Bunsei period (1818~30), those called "Zashiki-hondo" and those called Hoojo-type.

Keywords : type of the main building, Obaku-sect Buddhist temples, Chikugo district, Daiyuhoden, Mampukuji temple, Fukugonji temple

本堂形式, 黄檗派寺院, 筑後地方, 大雄宝殿, 萬福寺, 福嚴寺

はじめに

本稿は、九州地域の一つの特定地方における黄檗派寺院の中で、本堂形式が江戸時代を通じてどのような歴史的変遷をしたのかを、具体的に解明しようとする試みである。

日本建築史研究が黄檗派寺院に関して解明してきたこれまでの研究の範囲は、筆者の研究^(註1)も含めて、長崎の三つの唐寺、本山黄檗山萬福寺および各地方での中枢的寺院（禅堂を1つの独立した建物としてもつ寺院）にほぼ限られている^(註2)。今後行われる研究が、上記の範囲内に研究を限ってはいは、中国明清時代における建築文化の日本への伝播、黄檗派寺院に係わる建築文化の日本での確立、さらには確立した建築文化の日本各地中枢への伝播という歴史的展開過程の範囲内に限界づけられることになると考えられる。黄檗派寺院の建築文化に関する歴史的展開過程を研究する上では、上記の範囲外にも、隠元禅師の法系達によって各地方に伝播し普及し定着しさらには新たに付加された筈の建築文化にも目を向けることが重要だと考えられる。

そこで、本稿での研究対象となる範囲は、従来の研究対象に含まれていなかった地方の小寺院が多く含まれることになって、史料の収集は困難になる。江戸時代における黄檗派の末寺についての研究は、平成2年(1990)6月になってようやく公刊された黄檗宗末寺帳^(註3)の研究

から深まって行くであろう。従来の研究においても、黄檗派の宗勢については次のように推測される。本山黄檗山萬福寺が寛文元年(1661)に現在地で確立した後、江戸時代を通じて黄檗派の寺院数は爆発的に増え続け、本山の末寺調べによれば、延享2年(1745)に1043ヶ寺、文政5年(1822)には1240ヶ寺となっている^(註4)。しかし、こうした寺院数の増加が黄檗派の宗勢の拡大と直ちに単純に解釈して良いとは思えない。例えば、「黄檗派は寛文から元禄にかけて、爆発的な発展をとげ……(中略)……、ところが元禄末頃には早くも衰えを見せ始めた」^(註5)との見解もある。黄檗派の宗勢の研究は、末寺帳の公刊もあったことだし、今後各方面からの研究が進むと考えられる。一般的に言えば、江戸幕府は江戸時代前期から江戸時代を通じて新しい寺院開設は認めない方針であった^(註6)のだから、黄檗派の寺院数の増大は特異な現象と考えられるのである。具体的には、かつては他宗派であった荒廃寺院や無住寺院などを黄檗派へ転派させ再興した例が多いと考えられている^(註7)。転派し再興した寺院であっても、転派以前の他宗派との関係を考慮に入れば、黄檗派としての建築文化をもつ寺院なのであるから、ここで採り上げ得ると考えて、本稿を試みたものである。

次に、本稿において、何故に筑後地方南部を採り上げたかを説明しておく。当地方にはいまだ23ヶ寺院もの

* 九州大学工学部建築学科 助手

Assistant, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Kyusyu

黄檗宗寺院が登録され^{註8)}、筆者が調査し得た九州地域の中では最も黄檗宗寺院が今日も集中している地方である。当地方の黄檗派寺院は、隠元の法嗣である木庵（本山萬福寺第二代住持）からさらに法を嗣いだ鉄文道智を祖とする別峰下に廃寺も含めて全て属していて、派下別に考えてもまとまりのある一地域である。派下別黄檗宗寺院系図^{註9)}によって全国的に眺めてみると、紫雲派・長松下・緑樹下・聖林下等に属した寺院が、数において別峰下に属した寺院より多いが、廃寺となってしまった寺院も多いし、地域的なまとまりは別峰下のように一地方に限定されていない。別峰下の寺院は、当筑後地方南部の柳河藩領内（一時、柳河藩領内に三池藩が分藩独立したことがあるので、この時代は三池藩領も含む）のみに限られる。故に、派下別においても、地域的にも、当筑後地方南部が黄檗派寺院における建築文化の歴史的展開を考える際には適当な一地方であると考えた次第である。

当地方における黄檗派寺院の歴史的展開は、鉄文禪師によって当地方の中核的寺院として梅嶽山福嚴寺が開設されて以後、鉄文あるいは鉄文の弟子達を開山として続々と黄檗派の寺院が開設されて行き^{註10)}、明治5年（1872）10月の文書^{註11)}によれば鉄文禪師を開山とする寺院15ヶ寺、鉄文嗣法の弟子達を開山とする寺院は12ヶ寺、その他の別峰下の寺院を加えて、明治5年（1872）には当地方に黄檗派寺院が34ヶ寺存していたことになる^{註12)}。

これらの黄檗派寺院において、寺院規模の大小にかかわらず、寺院の本尊を祀るための堂すなわち本堂が、全ての寺院に建てられたと考えられる。そこで、本稿は、これらの本堂の形態面での形式を本堂形式と考えて、この本堂形式が江戸時代を通じて当地方においてどのように変遷したのかを具体的に解明することを研究の目的とする。そのために、今日まで保存されている江戸時代の本堂を平面について実測調査し、立面や建築細部の形態を調査し、これらの本堂の建設年代を知る史料を収集した。次に、本堂の建物は残っていないが、平面のみは判明する古絵図を特に旧柳河藩主家（立花和雄氏）蔵に探し出した。本山に保管されている明治13年（1880）頃の『寺院明細帳』に載っている本堂の間取り図は、明治時代に入ったものと言っても、参考になった。その他、残る写真によって、外観や内部を知ることができる本堂もある。各寺の歴史については、『鐵文禪師語録』は拠るべき史料と考えられるが、地誌類などその他の史料は寺伝に止まるものが多い。

こうして収集した資料を整理して、当地方における黄檗派寺院の本堂全てを、以下のような本堂形式にまず分類した。次に、各本堂形式に含まれる各々の本堂の建設年代について考えて、各本堂形式の出現した時期につい

て考察した。そして、筑後地方南部における黄檗派寺院の本堂形式とその変遷について、まとめた。

各本堂形式

1. 梅嶽山福嚴寺の大雄宝殿

筑後地方南部における黄檗派寺院の歴史は、梅嶽山福嚴寺（柳川市大字奥州町32-1）から始まっている。当寺は、曹洞宗の梅岳寺が空寺であったのを、柳河藩主が当地出身の鉄文道智を迎えて開山として黄檗派とし、寺名も改めて梅嶽山福嚴寺と名付けて再出発させた寺である^{註13)}。開山・鉄文禪師が当寺に入院したのが寛文9年（1669）8月24日のことである^{註14)}から、本山萬福寺の創建の寛文元年（1661）からわずか8年後のことであり、全国的に見ても早い開始である。

『鐵文禪師語録』^{註15)}巻第一の「住筑州山門縣梅岳山福嚴禪寺語録」によれば、冒頭の開山入院にあたって開山が「山門」「佛殿」「伽藍堂」「祖師堂」「方丈」において法語を示したことになる。『鐵文禪師語録』にのみ記載されているところの入院式における「佛殿」がどのような建物であるのかは全く知ることができない。『鐵文禪師語録』巻第十二の「行状」によって知られるように、この入院から13年目の延宝2年（1674）までには大雄宝殿等が落成しており^{註16)}、『鐵文禪師語録』巻第一の先述の入院法語に続いて書かれている「新殿樂成」して柳河藩主等が鉄文禪師に開堂をお願いしていることを延宝2年（1674）のことと判断して、福嚴寺大雄宝殿はこの延宝2年（1674）までに新たに建設された建物と考えられる。が、この大雄宝殿は現存しない。明治時代始めの頃解体されたと伝えられる大雄宝殿に安置されていた「大雄宝殿」の大額（300.0×126.7 cm）、巨大な対聯（1つが371.0×35.0 cm）、釈迦・阿難・迦葉の3像および大前机などは現本堂に安置されている。寺伝では、大雄宝殿が火災にあたり再建されたりしたということはない。そこで、延宝2年（1674）までに落成した大雄宝殿と思われる建物の平面は、立花和雄氏蔵の寛政元年（1789）改めの『福嚴寺惣地指図』中に描かれていると考えられる。これは土間式の建物と考えられ、「本堂」と表示されている^{註17)}。この平面図（図—1）に見られるように、殿内は正面五間・側面六間の規模であり、前面一間通りの通路部分が付設している。この前面一間通りの通路部分の前立柱が左右へ連なる廊下の柱より明らかに大きく描かれていることから判断して、本山萬福寺の寛文8年（1668）上梁の大雄宝殿^{註18)}と同じように、この前面一間通りの通路部分は構造的にも大雄宝殿の建物の中に取り込まれていたと考えられる。

以上のように、梅嶽山福嚴寺の大雄宝殿は、本山萬福寺の大雄宝殿と平面についてはよく似た建物であったと考えられる。平面の細部についての違いを掲げるとすれ

図-1 『福厳寺惣地指図』(立花和雄氏蔵)中の福厳寺大雄宝殿

ば、本山萬福寺の大雄宝殿が角柱のみ使用しているのと比べると、福厳寺の大雄宝殿は中央部あたりに丸柱の使用が認められることである。

福厳寺大雄宝殿の立面は、これを直接的に知り得る資料を今日もたないが、本山萬福寺大雄宝殿との関連の中で、次のように推測することが可能と考えられる。

まず、伽藍構成については、福厳寺が先記の寛政元年(1789)の『福厳寺惣地指図』に示してあるように本山萬福寺と同様な所謂コの字型の伽藍構成をしていたことはすでに拙稿で指摘した^(注1)が、さらに両寺の伽藍構成が同じであることを考える鉄文禪師の詩偈についての検討はここでの問題と直接関連しないので別稿^(注19)に譲る。このように、福厳寺は本山萬福寺と同じく、大雄宝殿を中心にして左右に禅堂と斎堂を配する所謂コの字型の伽藍構成をしていたのである。

大雄宝殿のみについても、福厳寺と本山萬福寺の関連をうかがう文言は、大雄宝殿に掲げられる対聯に見られるのである。本山大雄宝殿の対聯文言は、『黄檗清規』にあるように「紺殿莊嚴仏日を光す」と記してあって、大雄宝殿の建築としての莊嚴化が示されていると考えられるのに対して、禅堂・斎堂のそれらは修行する僧侶に対する精神的な心構えを示している^(注20)。他方、福厳寺の対聯は全て木庵の書であるが、大雄宝殿のそれは「紺碧雄宮瑞彩氤氲として」となっており大雄宝殿のみは建築としての莊嚴化が表明されていると考えられるのに対して、禅堂・斎堂のそれらは精神性についてのみ述べている^(注21)と考えられる^(注22)。故に、禅堂と斎堂に対する大雄宝殿のみの莊嚴化が、福厳寺大雄宝殿と本山萬福寺大雄宝殿には、各々の対聯文言に同様に表れていると考えられる。

そこで、福厳寺大雄宝殿の外観は、平面規模の大きさに加えて、本山萬福寺との比較において大雄宝殿の平面、大雄宝殿に掲げられた対聯文言の内容および伽藍構成が類似していることから、さらに福厳寺開始の歴史から判断して、本山萬福寺大雄宝殿と同じような外観屋根二重

のものであったと推測される。

大雄宝殿という建物名は、当地方の黄檗派寺院では、当寺に限って用いられている。大雄とは仏陀の称号^(注23)であるから、大雄宝殿とはお釈迦様をお祀りする堂宇に対する美称と考えられ、一般的用語とも思われる。しかし、当地方において、今日までの調査では、後述する全ての本堂について、本尊が釈迦像である場合でも、大雄宝殿と呼ばれたことはない。

以上述べてきたように、歴史的に見れば福厳寺は当地方での黄檗派の始まりの寺院としてとらえられるし、形態上あるいは建物名から見ても福厳寺大雄宝殿のみは本山大雄宝殿との直接的関係の中で当地方において発生したと考えられ、後述する各形式の本堂とは異なると考えられるので1分類として先ず第1に掲げた。そして、この福厳寺大雄宝殿こそは延宝2年(1674)までには当地方にはじめて出現した本堂形式と考えられるのである。

2. 土間式本堂

江戸時代において当地方の黄檗派寺院の本堂が土間式の本堂であったと確認される寺院は、前記福厳寺大雄宝殿を除くと、現存の建物で3ヶ寺、江戸時代の絵図や写真として記録に残るものが2ヶ寺であり、合計わずかに5ヶ寺のみである。なお、本山萬福寺所蔵文書中の明治13年(1880)頃の『寺院明細帳』^(注24)には当地方のほぼ全寺院の本堂の間取り図が付載されているが、これらの図中にも上記以外の寺院に土間式の本堂は見当たらない^(注25)。

判明した5ヶ寺における土間式の本堂は仏殿と記している本堂もある。これら5ヶ寺の本堂は福厳寺大雄宝殿と同じく土間式であるが、別の1分類として掲げているのは、福厳寺の土間式の本堂のみ大雄宝殿と称され、後述するように平面規模は福厳寺大雄宝殿よりずっと小さく、外観は全で一重の屋根と考えられて福厳寺大雄宝殿の外観屋根二重と推測されるのとは形態面で異なると考えられるからである。加えて、寺全体としては、伽藍構成および黄檗派寺院としての歴史的な位置づけが異なることも、ここでの5ヶ寺の土間式の本堂と福厳寺大雄宝殿を分類分けした理由である。

そして、本稿ではこれら5ヶ寺の土間式の本堂形式を土間式本堂と名付けた。

以下、土間式本堂の実例について考察する。

イ. 竜首山法雲寺の土間式本堂

昭和34年(1959)焼失するまで土間式本堂のあった竜首山法雲寺(大牟田市倉永872)は、同地にあった崇勝寺を東後方に移転させ、同地に鉄文を開山として延宝8年(1680)に創設した寺院と言われる^(注12)。『鐵文禪師語録』巻第十二の「行状」には「(延宝)庚申年太守源公新創龍首山法雲禪寺。延師為開山初祖。」とあって、延宝8年(1680)柳河藩主によって当寺が新創されたこ

とが記されている。昭和34年(1959)まで保存されていた土間式本堂は、同寺に残る写真による細部形態の年代推定より、江戸時代後期の建物と思われる。

当法雲寺の江戸時代における土間式本堂の平面を描く図が2枚ある。立花和雄氏蔵の寛政2年(1790)改めの『倉永法雲寺』図と伝習館文書中の江戸時代後期頃と思われる『寺社古絵図』中の『法雲寺』図である。両者はほぼ同じ間取りをしており、より詳しい前者の図を掲げる。当図(図-2)には最前列の柱が5本描かれているが、『法雲寺』図には見えない右から2本目の柱が間違っ付け加えられた柱と考え、平面の規模は前面三間・側面七間である。「土間佛殿」と表示してある。中央部を丸柱として、四周に一間通り角柱を廻して内部空間とする。前面には一間通りの空間があるが、殿内は建具が描かれる前方より2列目の柱列より内と思われるので、この前面一間通りは吹き放しと考えられる。中央奥に仏壇、両側壁に脇仏壇、左側面奥の方に突出した「佛道具入」が描かれるが、この「佛道具入」は出入口が外部に取り付けられている。『鐵文禪師語録』にある唐匠游君亨の彫った十八大阿羅漢像は両脇仏壇に置かれていたのであろう。当図に描かれた「土間佛殿」は土間式本堂であり、福厳寺大雄宝殿の寛政元年(1789)の図と較べると、規模はずっと小さいが、平面計画については前面一間通りに吹き放し部分をもつことや中央部分に丸柱を使用することなどは同じである。

この図における平面のあり方や規模は、残る写真から判断すると、昭和34年(1959)まで保存されていた土間式本堂とはほぼ等しい。しかし、昭和34年(1959)まで保存されていた土間式本堂の細部形態が、図の寛政2年(1790)までさかのぼれるかどうか即断できない。が、たとえ再建であったとしても、建築形式は引き継がれたと推定される。

昭和34年(1959)まで保存されていた土間式本堂は、

図-2 『倉永法雲寺図』(立花和雄氏蔵)中の法雲寺の土間式本堂

残る写真によると、立面は草葺寄棟屋根の本体があり、前面一間通り吹き放し部分には一段低い位置に瓦葺の片流れの屋根が付いている。

さらに遡って創建の当寺仏殿がどのような形式であったのかを考える資料はない。が、当寺には火災等の伝えは昭和34年(1959)までなく、唐匠の彫った羅漢像も昭和34年(1959)まで土間式本堂内部の両脇仏壇に安置されていた。創建の仏殿が寛政2年(1790)の図にある「土間佛殿」や昭和34年(1959)まで保存されていた土間式本堂と同じ本堂形式であったことは推測される。

ロ. 泰雲山崇勝寺の土間式本堂

泰雲山崇勝寺(大牟田市倉永1255)は、前記法雲寺のすぐ近くに所在する。古来曹洞宗に属し旧名を弘濟寺と称していたが、現在の法雲寺の寺地にあった寺を鳳来寺という寺跡の現在地に移転したものであり、貞享4年(1687)鉄文禪師を開山として黄檗派に帰し崇勝寺と称したと言われる^{註12)}。創建については延宝5年(1677)10月と貞享4年(1687)の二つの説が掲げられている後世の記録もある^{註11)}。

現在、宝形造瓦葺の床を張る一室の独立した本堂一宇が保存されている。当堂は復元すると、現位置で土間式本堂であったことが判明する。推定復元平面図は図-3の通りである。平面は正面三間・側面六間であり、内部の中央の4本の柱が円柱であることや前面一間通りに吹

図-3 崇勝寺の土間式本堂の推定復元平面図(筆者製図)

き放し部分をもつことなど、前記法雲寺古図の「土間佛殿」と形式が同じである。調査と聞き取り調査で、立面は草葺寄棟の一重屋根の本体に前面の一段降りた位置に瓦葺の片流れの屋根が付いていたことが判明した。当寺の土間式本堂は、平面については法雲寺古図の「土間佛殿」と、立面については昭和34年(1959)まで保存されていた法雲寺の土間式本堂とよく似ている。この崇勝寺の土間式本堂の建設年代は、山門外立石(昭和57年に法雲寺へ移設)の紀年銘にある文政11年(1828)頃のもの、細部形態より推定される。

『鐵文禪師語録』巻第三の「住筑州三池縣泰雲山崇勝禪寺語録」によると、延宝丁巳年(五年=1677)泰雲山崇勝禪寺の入院式にあたって、法語を示した場所が、「山門」「佛殿」「伽藍堂」「祖師堂」「方丈」に及んでいる。この語録によると崇勝寺は延宝5年(1677)に鉄文禪師によって開始されたことになり、既に記した寺伝を併せ考えると延宝5年(1677)には崇勝寺は現在の法雲寺の地にあったことになるが、この「佛殿」については何も知ることができない。なお、後世の記録として既に記した貞享4年(1687)創建というのは、現在の地においての創建を示しているのかもしれない。いずれにしても、延宝5年(1677)の『鐵文禪師語録』に見える「佛殿」ならびに現在地において創建された本堂については、それらの形式は全く不明である。

現存の同寺土間式本堂は、文政11年(1828)頃の建物と推定されるが、前記法雲寺の判明する土間式本堂と平面と立面の類似が認められる。なお、この建設の推定年代は創建よりずっと遅れるので、旧宗派との関係は考慮に入れなくてもよいと考えられ、黄檗派寺院としての本堂として現在地に再建されたものと考えられる。

ハ、大慈山慧日寺の土間式本堂

大慈山慧日寺(大牟田市大字岩本2589)は、浄土宗の寺院を、延宝5年(1708)鉄文の法嗣・霊峰元秀が転派させて、黄檗派として開設した寺院であると言われる^{注12)}。

現在の本堂の平面は図-4のような土間式本堂である。平面の形式は、既に述べてきた古図の法雲寺「土間佛殿」や崇勝寺本堂の推定復元平面と同じである。正面三間・側面六間であり、丸柱がかなり多く使用されているが、前面一間通りは例によって吹き放し部分となっている。ただし、立面は一重・入母屋造・本瓦葺であり、前面一間通り吹き放し部分も本体の屋根がそのまま葺き降ろしとなっている。

当堂は寺蔵の2枚の棟札^{注26)}によって、宝永5年(1708)に創建されたが、延享2年(1745)に再建され、さらに天保10年(1839)に建築された「観音宝殿」と考えられる。建築細部の形態もこの天保頃のものとしてされている^{注27)}。

慧日寺 本堂 (福岡県大牟田市大字岩本)
24.3.1

500 cm
1980.6.9.調査

図-4 慧日寺の土間式本堂の現状平面図(筆者製図)

本尊が観音であるのは転派以前の寺院から引き継いだものであろう。

同寺は山内寺院を現在も3ヶ寺ももつ程の大寺院であるが、福厳寺のように禅堂・齋堂を独立した建物としてもってはならず、ために所謂コの字型の伽藍構成もしていない。当「観音宝殿」が筑後地方南部における黄檗宗寺院の現存の土間式本堂では最大規模のものである。図-1に掲げた寛政元年(1789)の福厳寺大雄宝殿と較べると、奥行きは僅かに勝るが正面幅がずっと小さい。平面形式については、中央部に丸柱を用いることと前面一間通りに吹き放し部分を付設することは、図-1の福厳寺大雄宝殿、図-2の旧法雲寺仏殿、図-3の崇勝寺の復元した土間式の本堂と同じである。

転派する以前の浄土宗と当土間式本堂との関連では本尊については考えられるものの、本堂形式については浄土宗とは関連がなく黄檗派との関連で捉えられると考えられる。

二、瑞雲山聖寿寺の土間式本堂

瑞雲山聖寿寺(柳川市大字西魚屋町52-1)は、曹洞宗の寒山寺を改めて寛文9年(1669)黄檗派に転じ開山を鉄文禪師とし明和5年(1768)に現在地に移り寺名も

聖寿寺と改めたとされる^{註28)}。現在の本堂は近年改修があったが、土間式本堂のおもかげは残す。江戸時代の最末期の部分も残る。明治13年(1880)の『寺院明細帳』^{註24)}に載る略図には「本堂 五間五間 瓦敷」とある。現在もある前面一間通り吹き放し部分は江戸時代からの踏襲であろう。現状の棧瓦葺の立面は、慧日寺本堂と同じであり、一重、入母屋造である。

ホ. 雪峰山靈明寺の土間式本堂

雪峰山靈明寺(福岡県山門郡山川町河原内)は、昭和55年(1980)6月の『黄檗宗寺院名簿』には記載されていたが、現在は名簿からもその名を探し得ない。寺地には現在も立派な旧柳河藩主の墓所も残る。鉄文を開山と仰ぎ、享保9年(1724)の創設と伝える^{註11)}。

当寺の土間式本堂は、古図に残るのみである。立花和雄氏蔵の『雪峰山図』中の「佛殿」がそれである。当古図は、既に引用した福厳寺や法雲寺の立花和雄氏蔵の各古図と同じ寛政年間(1789～1801)頃のものと思われる。この「佛殿」(図—5)は、上記したいずれの土間式本堂よりさらに小規模となり、正面三間・側面三間の奥壁に仏壇を置いたものであり、前面と側面に通路を付設した平面である。脇仏壇も構えているが、内部には柱は立たない。前面等に通路空間を設けているのは、やはり他の土間式本堂と共通している。使用の柱が全て円柱に描かれているが、同古図中の他の建物が角柱で表現されているので、当「佛殿」の図の円柱表示は実態を反映しているものと考えられる。

ヘ. まとめ

以上、福厳寺大雄宝殿以外の5例の土間式本堂は、当地方の中核の寺院である梅嶽山福厳寺のそれと、平面形式において類似している。中央部分において丸柱を使用すること(靈明寺の土間式本堂には内部に柱がないが、丸柱を全面的に使用)および前面一間通りに吹き放し部分を付設することである。前者の丸柱の採用は、本山萬福寺の大雄宝殿においては見られないので、福厳寺においてまず採用されたのち、この福厳寺大雄宝殿のあり方を受け入れたものであろう。後者の前面一間通り吹き放し部分の採用は、福厳寺大雄宝殿のように禅堂や齋堂へ

の通路としての機能をもたずとも、他寺の5例では全て採用するという徹底ぶりを示している。

ただし、福厳寺大雄宝殿と他の土間式本堂との違いは、内部に柱をもたない靈明寺の土間式本堂を除いて、室内にある柱で囲まれる中央部分が福厳寺大雄宝殿のみは正面5.0間側面4.0間であって横長であるのに対して、他の4つの寺の土間式本堂は全て正方形となっている。故に、これら4つの寺の土間式本堂は、全体の平面が奥行き深くなるのである。

立面においては、法雲寺・崇勝寺および慧日寺の土間式本堂において判明したように屋根が一重であり、福厳寺大雄宝殿で推測したような外観屋根二重ではない。

当地方における黄檗派寺院数全体から見ると、土間式本堂の実例は福厳寺大雄宝殿を含めても6ヶ寺と少ないが、靈明寺仏殿のような小規模な本堂さえ土間式であった例から考えて、鉄文や彼の弟子達が開設した各寺院において建てられた創建の本堂のかなり多くが土間式本堂であった可能性は高いと考えられる。

3. 床を張る一室の独立した本堂

江戸時代を通じて、筑後地方南部における黄檗派寺院の本堂の全てが土間式の本堂ばかりであった訳ではない。黄檗派寺院に関する従来の研究からは本堂は土間式であると考えられがちであるが、全く注目されていない床を張る一室の独立した本堂も見られる。

慈観山禅林寺(福岡県山門郡山川町大字河原内)は、宗派不明の慈観院を元禄2年(1689)鉄文禅師が福厳寺の末院としたが未だ再建に及ばず久しく空院であったのを、鉄文の法孫である泰陽淨至が中興して今の地に移し寺名も禅林寺と改めたと伝える^{註29)}。

本堂(写真—1)は入母屋造、一間向拝付き、銅板葺である。平面は図—6のように、正面三間・側面四間・一間向拝付きである。南面している。前面に板縁が付き、内部は一室である。堂内の奥壁に一段高い奥行半間の仏壇を設け本尊と位牌を祀る。仏壇前方半間幅は板敷。さらに前方はこの板敷と同高の畳14帖敷き。東側壁をはり出させて脇仏壇等を付設している。天井は横方向の棹

図—5 『雪峰山図』(立花和雄氏蔵)中の靈明寺の土間式本堂

写真—1 禅林寺本堂の正面(筆者撮影)

図-6 禅林寺の本堂などの現状平面図 (筆者製図)

縁天井が一律にはられ室内はまったく一室扱いとなっている。丸柱の使用は室内奥の中央仏壇面脇のみである。当本堂は、すぐ横の式台付き玄関奥の畳4帖敷きの室を通じて別棟の庫裏へと連結はしているが、平面的にはほぼ独立しており、構造的には独立の棟となっている。当禅林寺本堂は建設当初より大きな改造は行われておらず、当初よりこのような床を張る一室の独立した本堂であったと考えられる。当本堂の建設年代は、玄関・書院とも同年代のものと思われるが、寺号の扁額銘および本堂内に掲げられる対聯の製造墨書銘にある文政5年(1822)頃のものと考えられ、当推定年代に建築の細部様式も合う。

隣接する同時代の書院と比べると床高や内法高が高い。床高は書院が約63 cmに対して本堂は約120 cmであり、内法高は書院が173.5 cmに対して本堂は197.0 cmである。しかし、室内の構成は畳敷き・杉戸を含む建具・棹縁天井および漆喰壁など住職等僧侶の日常生活空間である庫裏と同じである。

当禅林寺本堂の推定建設年代の文政5年(1822)は、当寺を現在地に中興した黄檗派の僧・泰陽浄至の寂年である享保4年(1725)4月15日^(註30)からさらに百年もたっており、調査の結果他所からの移築も考えられないので、この本堂は黄檗派寺院の本堂として同地に建てられたものと考えられる。

この禅林寺本堂のような、床を張る一室の独立した本堂がいつ頃から黄檗派寺院の本堂として当地方で採用されたか史料がなくて明確とはなし得ないが、遺構で見る

図-7 『寺院明細帳』(本山萬福寺文華殿蔵)中の宗永寺本堂

限り、当禅林寺本堂が最も古い。

このような床を張る一室の独立した本堂を今日採用している寺院は多いが、この中で建設年代が江戸時代まで遡ると考えられる本堂は、この禅林寺本堂以外には見当たらない。

本山萬福寺所蔵の明治13年(1880)頃の『寺院明細帳』で探し出しても、わずかに春林山宗永寺本堂の平面の略図(図-7)が同形式と思われるくらいである。当宗永寺本堂も禅林寺本堂と同じく南面し、玄関を挟んで書院と連結している。本堂は正面四間側面三間であって奥壁に接して仏壇を設ける。側面に突出する「附」とは附属室という意味であろう。前面に書かれている「月臺」とは、同じ『寺院明細帳』に記載の仏頂山正法寺(後出)の平面図中の式台をもつと思われる玄関にも「月臺」と書かれているところからみると、本山萬福寺の大雄宝殿前方の月台のことではなくて、低い床がある突出部を指していると考えられる。そのように「月臺」を捉えれば、この宗永寺本堂も禅林寺本堂と同じように床を張る一室

図—8 福厳寺の現本堂の現状平面図（筆者製図）

の独立した本堂である。玄関を挟んで書院と連絡している構成も禅林寺本堂と同じである。簡単な略図であるため正確な判断はできないので、この宗永寺本堂は土間式本堂である可能性もある。

床を張る一室の独立した本堂と名付けた本堂形式は、土間式本堂に見られたように完全に他の建物と切り離されて独立している訳ではなく、平面的には玄関の間と連なって畳敷きの住職など僧侶の日常生活の場である書院や庫裏などに無理なく連結されている。

江戸時代における他宗派においても、当地方において、このように小規模の本堂でありかつ床を張る一室の独立した本堂が見られる。例えば前に引用した伝習館文庫蔵の『寺社古絵図』中、黄檗派寺院でない『谷川寺』の本堂にもこの本堂形式は見られるので、この本堂形式が黄檗派寺院独自の本堂形式とは考えられない。しかし、多くの近世社寺調査報告での指摘は極めて少ない。

4. 方丈型の本堂

次に、二列三間六室の長方形平面をもつ方丈建築の基本的間取り^{注31)}と平面の形態が似ている本堂形式がある。黄檗派寺院においても、早く本山萬福寺の方丈において同じような間取りをもつ建物が採用されている。しかし、これら黄檗派寺院における方丈と中世から続いてきた二

列三間六室の長方形平面をもつ方丈建築との係わりは今後の課題である。

そこで、当地方の黄檗派寺院にみられる同じような平面をもつ本堂形式を方丈型の本堂と名付けて、以下の建物について考えてみる。

イ. 梅嶽山福厳寺の現本堂

前出梅嶽山福厳寺において今日本堂と呼んでいる建物は、平面図（図—8）に示すように、前面の向拝を除くと、三面に入側を巡らした二列三間六室の方丈建築の基本型の間取りであり、この間取りからこの建物は江戸時代における禅宗寺院の本堂でもよく見かける二列三間六室の方丈型本堂^{注32)}の1例に入れられるとも考えられる。

が、当堂は寺蔵の棟札原本によって、文化10年（1813）上棟の「祠堂」と考えられ、この「祠堂」は前記した寛政元年（1789）の『福厳寺惣地指図』に見る「薬師堂」（図—9）の平面と機能を踏襲した建物であって、位置も同位置に建っている。この「薬師堂」には向拝も付加していないので、方丈型本堂の基本的な間取りとなっている。

そして、この現在の本堂すなわち「祠堂」が建った文化10年（1813）には、まだ土間式の本堂である大雄宝殿が当堂の前方に聳え建っていたのである。だから、こ

図-9 『福厳寺惣地指図』（立花和雄氏蔵）中の薬師堂

の現本堂は柳河藩主の菩提寺の位牌所としての機能に応じた建物なのであって、福厳寺の黄檗派寺院としての本尊を祀るための本堂は、先記した大雄宝殿であると考えられる。

なお、二列三間六室の方丈型平面をもつ古図の「薬師堂」は恐らく黄檗派へ転派する以前の寺院から踏襲した堂宇名称や平面であって、その中尊であった薬師仏も古い時代のもと言われている^{注26)}。

現在この祠堂の中で中尊が釈迦仏であり両脇侍が阿難・迦葉両像と変わっているのは、明治初年頃の大雄宝殿等の解体にあたって、大雄宝殿の背後にあった「祠堂」へ合祠する際に、薬師仏を脇に移座させ、黄檗派寺院としての本尊釈迦仏を中尊とし、ここに「祠堂」を「本堂」と称する経過をたどったものと考えられる。

故に、この現本堂が採用する二列三間六室の方丈型の平面が、当福厳寺で当初からの計画として、黄檗派寺院の本堂として採用されたものではない。

ロ. 河北山常楽寺の本堂

黄檗派寺院を除く曹洞・臨済両禅宗寺院において江戸時代に頻繁に見られる二列三間六室の方丈型平面の本堂は、当地方の現在使われている本堂中に完全な例は1例も見られない。

しかし、その存在が本山萬福寺蔵の明治13年(1880)頃の『寺院明細帳』に載る間取り図より窺える。

河北山常楽寺は、福岡県山門郡山川町河原内にあったが、現在は廃寺となっている。当寺は宝永元年(1704)鉄文の法嗣であり福厳寺第二代住職であった玄堂元要を開山として創設し、天保元年(1830)福厳寺第10代住職であった富峰如嶺が再建したと伝える^{注12)}。

図-10はあまりにも簡略な図であるが、その間取りのあり方は、二列三間六室の方丈型本堂のあり方を示していると考えられる。ただし、六室のうちの一室が2つに分割されているし、中央にある「佛間」と「佛壇」は入れ換った方が理解し易い。いずれにしても、二列三間

図-10 『寺院明細帳』（本山萬福寺文華殿蔵）中の常楽寺本堂

図-11 『寺院明細帳』（本山萬福寺文華殿蔵）中の正法寺本堂

六室の方丈型本堂に近い平面ということは言える。「常楽寺建物繪圖面」と記されているが、当図のみしか常楽寺の所には掲げられていないので、本尊は当然この図中の「仏壇」に祀られると考えられて、この図が本堂の間取りを示していることになる。

明治13年(1880)頃の『寺院明細帳』の中には、方丈型の本堂の平面を示すものは、この常楽寺の他にも、次の2寺がある(所在地は現在のもの)。

- ・宇治山通玄寺(大牟田市吉野673)本堂
- ・竜宮山福聚庵(福岡県三池郡高田町黒崎開1954)本堂

うち、後者の福聚庵本堂はその一部の遺構が残っており、方丈型の本堂の正面中央に突き出して付設される差し架け屋根の出入口部における細部形態から、江戸時代末期頃の建物と推定される。

ハ. 仏頂山正法寺の本堂

当寺は、福岡県山門郡山川町大字河原内273-1に所在する。享保元年(1716)鉄文の法嗣・悦堂元逸の創設と伝える^{注12)}。現在の本堂は新しい。明治13年(1880)の『寺院明細帳』に記載される書院などを含む全体の間取り図の内の本堂部分だけ取り出すと、図-11のようになる。南面しており、南と西の両面に縁を付しており、北東隅と東側へ別室や庫裡等が接続している。中央奥に

「佛壇」を構え、本尊前に「拾二」帖の室を置き、西側に接して、開山（悦堂元逸）の場所として前方に「八」帖の室を設け、「佛壇」の前方の間の東側に「拾二」帖の室を置き、当室の奥には「八」帖の座敷が付く。南側の半間通りが入側となっている。

当平面は、確かに奥の室が同じ奥行きとなっていないので整然とした二列三間六室の方丈型本堂ではないが、二列三間六室の方丈型本堂の簡略型とすることもできると考えられる。

二. 塔頭・別峯院の客殿（方丈）

本山萬福寺には、鉄文および弟子達の宿院としての別峯院が鉄文在世の延宝3年（1675）3月、既に建てられている。それで当別峯院は、筑後地方南部の各寺院との関連は密接なのである。

当別峯院の中心的建物である客殿が二列三間六室の方丈型本堂の平面をしていたのである。創建当時の建物かどうかは不明であるが、秋篠文夫氏蔵の古文書中の『黄檗山塔頭別峯院方丈庫裡等建直し御願』という延享元年（1744）5月の図にのる方丈^{注33}および当図とほぼ同じ平面をもつ天明8年（1788）の萬福寺蔵の客殿の図がある^{注34}。後者の客殿の図（図-12）を見ると、正しく典

型的な二列三間六室の方丈型本堂の平面をもっている。南面している当客殿の東側に付設の開山堂は当然別峰下の祖・鉄文禅師の墓所である。

ホ. まとめ

完全に保存されている実例は1例もないが、筑後地方南部にも、明治13年（1880）頃には二列三間六室の方丈型の本堂形式が採用されていたことは指摘できた。

図-12 『諸伽藍并塔頭繪圖』（本山萬福寺文華殿蔵）中の別峯院客殿

図-13 江月寺本堂の現状平面略図（筆者製図）

福聚庵本堂の一部残存遺構の推定年代によって、このような方丈型の本堂形式は、江戸時代末期には当地方でも採用されていたと考えられる。

5. 座敷本堂

当地方で座敷本堂と呼ばれている別の形式の本堂がある。以下、具体的に実例を掲げる。

イ. 松濤山江月寺の座敷本堂

松濤山江月寺は、福岡県山門郡山川町大字河原内1341にあって、随分と人里離れた山奥に所在する。寛文12年(1672)福岡県三池郡高田町江浦で創立され、元治元年(1864)年現在地に移転されたと伝えられる^{註12)}。移転時の住持が、本山萬福寺の住持ともなった独唱真機であり^{註35)}、この独唱禅師は福厳寺の第14代住職にもなった。

当寺の現本堂は、今まで述べてきたいずれの本堂の形式とも異なっている。屋根の主要部分は旧状草葺の寄棟屋根となっている。平面は図-13である。間取りは、北西部に塙の四半敷の土間とした台所部分があり、この土間に接して板張りの大きな空間がある他は、全て小さな和室に分割されている。建物は南面している。式台付きの玄関が構えてある。この玄関に両開き扉が付いていることは、当地方の格式を重んじる伝統的住宅とは異なる。内部の各室のあり方は、伝統的住宅とほとんど変わらない。入側縁がある。床の間や違い棚等の座敷飾りを揃える8帖の部屋は、一般の伝統的住宅では座敷にあたるが、「方丈」と呼ばれている。これらの部分までなら僧侶でない一般世俗人の住宅にも見られるものであるが、この「方丈」のさらに奥に寺院としての「本堂」と呼ばれている部分が設置されている。しかし、この「本堂」も伝統的住宅の部屋構えをとるに過ぎない。すなわち、奥(北側)室の2×2間は奥壁に接して仏壇を設けて中央に本尊を脇に位牌を祀り、仏壇前方は板張であり、天井は棹縁天井である。前(南側)室は引違いの襖で仏壇のある奥室と隔てて、2×2間すなわち8帖の畳敷きであり、棹縁天井の部屋である。さらに南側には、障子で隔てて入側縁が付く。確かに、この棟においては、この「本堂」の部分が一番上位の位置を占めていると考えられ、伝統的住宅の中に占める位置において、一般世俗人の用いる仏間とは異なるとも考えられる。しかし、この「本堂」における床高と内法高はじめ、壁・床および天井の在り方は、「方丈」は勿論他の部屋とも変わらず、伝統的住宅の部屋構えと異ならない。当江月寺本堂には屋根裏に独唱禅師自身が書いた上梁銘があつて^{註36)}、文久2年(1862)上梁と分かり、建築様式もその頃のものとして推定される。

こうした本堂の形式は、従来まったく知見にないものである。

当寺は所在地が山奥深くにあるため、独唱禅師が山に

引き籠もる隠居のための寺として建てたとも考えられる。しかし、同じような形式の本堂は、以下に実例を掲げるように、当地方においてはその他にもかなり多くあり、座敷本堂と呼んで親しまれている^{註37)}。

ロ. その他の座敷本堂

本山萬福寺蔵の明治13年(1880)頃の『寺院明細帳』を調べると、次の2つの寺院の本堂もこの座敷本堂にあたる。

- ・臥雲山太梅庵(大牟田市大字上内南936)本堂
- ・霊明寺(既出)本堂……これは、既に述べた寛政年間(1789~1801)頃の図に描かれた土間式本堂(「佛殿」)がこの『寺院明細帳』の座敷本堂へ変更されたものと考えられる。何故なら、古い『雪峰山図』の土間式本堂である「佛殿」は、『寺院明細帳』には記載がない。

しかし、上記2寺の座敷本堂は現存しない。

ハ. 北関山崇寿寺の座敷本堂

北関山崇寿寺は、元禄元年(1688)鉄文の開山とし開始され、福岡県山門郡山川町北関に昭和20年代まであったが、今は廃寺となってしまったと言われる^{註12)}。明治13年(1880)の『寺院明細帳』に記載の図は図-14のようである。本堂の向拝は南面する。北側へ四帖さらに八帖と各室が続き、一番奥にある十帖畳敷きの伝統的住宅の部屋に寺の本尊を祀る仏壇がある。しかも、仏壇は奥壁にあたる北壁ではなく、東壁を突出させて仏壇を設置してある。この十帖畳敷きの部屋では、この仏壇が伝統的住宅の座敷における床の間の位置を占めて、仏壇脇の北側には座敷飾りの「ショイン」(「書エン」と記される)さえ付設される。当室は「客殿」と名付けられている。

ニ. 桐林山鳳来寺の座敷本堂

こうした座敷本堂と呼ばれる形式の本堂は、次の寺にも現存するが、明治13年の『寺院明細帳』の間取り図と異なるために江戸時代の本堂ではないと考えられるので、ここでは平面図を掲げない。

- ・天瑞山吉祥寺(福岡県山門郡山川町大字立山1049)本堂

- ・福聚山法輪寺(大牟田市大字上内2245)本堂

明治13年(1880)の『寺院明細帳』とほぼ同じ平面で残存するのは、桐林山鳳来寺(大牟田市岩本)の本堂である。鳳来寺は慧日寺(既出)の山内寺院の1つである。享保11年(1726)柳川において創立されたが、安政2年(1855)に現在地に移転したと言われる^{註12)}。図-15が現状の平面図である。ほぼ南面する。東側にさほど大きくない土間部分があつて大戸の入口があるが、別に玄関をもつ。一番奥の部屋は南側に縁側を付けた伝統的住宅の座敷にあたる部分である。当室には床の間も設置されている。この室は「本堂」と呼ばれている。こ

Architectural floor plan of Hōkai-ji temple. The plan shows a complex arrangement of rooms with dimensions in centimeters. Key areas include a main hall (本堂) with a 'Kōrin-tō' (桐陰堂) label, a 'Shōin' (書院) area, and a 'Dō' (道) area. A north arrow is in the top left, and a scale bar (0 to 500 cm) is in the bottom right. The date '1980. 7. 6' and the name '高橋' (Takahashi) are at the bottom.

NII-Electronic Library Service

り、当地方の黄檗派寺院における本堂形式に新しい動きが始まったと考えられる。

次に、江戸時代末期頃から、禅宗他派の本堂形式にも共通する二列三間六室の方丈型の本堂形式が採用されている。

さらに、座敷本堂と呼ばれている本堂形式がある。この本堂形式は、座敷本堂という呼び名の通り、伝統的住宅に同化せんばかりの親しみのある本堂形式であり、江戸時代末期から盛んに用いられた。

以上が、具体的資料を用いて忠実に解明を試みた筑後地方南部における黄檗派寺院の本堂形式の変遷である。江戸時代後期以降のみに大半の資料が集中している。さらに、はじめに述べたように小さい寺院がほとんどであるため史料の収集は困難であった。しかし、こうした小寺院をも含めて本堂形式について、筑後地方南部の黄檗派寺院においては以上のような変遷が行われていることが具体的に解明できた。

なお、本稿では本堂の形態面での形式のみについて注目している。本堂形式がもつ象徴的意味も考えられるが、黄檗派寺院でこれを語る資料を今何ももっていない。今後、別峰下の禅僧の語録等の中に関連する資料を探し出せば、具体的に検討できるかも知れないが、今後の課題としたい。

終わりに、本稿を成すにあたっては、九州大学教授前川道郎氏と九州歴史資料館八尋和泉氏には大いにご教示を受けた。また、黄檗宗寺院関係では、故田谷黙雷、林雪光、中尾文雄、鳥越文邦、宮崎旭常、龍岡弘道、花岩スエ子、花岩友樹、常磐英之の各氏をはじめ、多くの方々のご教示を恭なくした。記して、深く謝意を表す。

本研究の成果の一部は、文部省科学研究一般研究(C)「九州地域における黄檗宗寺院建築の歴史的展開過程に関する研究」(代表者 山本輝雄)による。

注

- 1) 拙稿：「九州の黄檗宗寺院における2つの伽藍構成について」(『日本建築学会計画系論文報告集』第389号、昭和63年7月)と拙稿：「九州の黄檗宗寺院における門形式および天王殿の位置と向きについて」(『日本建築学会計画系論文集』第415号、平成2年9月)。
- 2) 代表的なものは、飯田須賀斯：『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』(昭和28年10月、相模書房)や桜井敏雄、大草一憲：「黄檗宗寺院の伽藍計画に関する研究—法雲寺の建築と伽藍計画を中心として—」(美原町史紀要『美原の歴史』特別号、昭和58年3月、美原町教育委員会)。
- 3) 竹貫元勝：『近世黄檗宗末寺帳集成』(平成2年6月、雄山閣出版)。
- 4) 田谷黙雷：『槃林集』(昭和42年3月、聖福寺)。
- 5) 林 雪光：『黄檗文化』(昭和47年3月、黄檗山萬福寺)のp.20。
- 6) 辻善之助：『日本佛教史 近世篇之二』(昭和28年3月、岩波書店)のp.340。

- 7) 『前掲注3書』のpp.25～30「黄檗宗の宗勢」。
- 8) 『黄檗宗寺院名簿』(平成元年3月、黄檗宗務本院)。
- 9) 『前掲注4書』所収。
- 10) 拙稿：「南筑後地方における黄檗宗寺院建築の展開」(『筑後柳川福厳禅寺—付。筑後の黄檗寺院—』、昭和60年3月、九州歴史資料館)と拙稿：「南筑後地方における黄檗宗寺院建築の展開 付。筑後の黄檗宗寺院建築目録」(『黄檗文庫』No.82、昭和60年7月、萬福寺文華殿)。
- 11) 大慈山慧日寺(福岡県大牟田市大字岩本2589)蔵の『壬申年慧日寺記録』。同文書の閲覧にあたっては、同寺住職・鳥越文邦氏に大層お世話になった。記して、謝意を表す。
- 12) 鳥越文邦：『費隠禅師と其の著、五燈嚴統一附。筑後の黄檗—』(昭和61年8月、大慈山慧日禅寺)。
- 13) 『福厳開山鐵文禪師』(昭和11年4月、福厳寺)のp.4。
- 14) 鉄文禪師の伝記は、近年でも数種でている。そのうちの1つは次のものである。中尾文雄：『福厳開山鉄文禪師伝』(昭和61年6月、梅嶽山福厳禅寺)。
- 15) 同書の板木(版木)は、福厳寺の奥深くに蔵される。筆者閲覧のものは、かつて、この板木(版木)を用いて刷られた黄檗研究の大先達・門司の故吉永雪堂氏のもののコピーである。同書の内容については、現福厳寺住職・龍岡弘道氏にご教示を受けた。記して、謝意を表す。
- 16) 次のように見える
「延寶甲寅年大雄寶殿選佛場禪悦堂方丈寢堂浴房寮寮一新樂成」。
- 17) 当図について、柳川古文書館の中野等氏にご教示を受けた。記して、謝意を表す。
- 18) 『重要文化財萬福寺大雄宝殿・禅堂修理工事報告書』(京都府教育庁指導部文化財保護課編集、昭和45年3月)。
- 19) 拙稿：「梅嶽山福厳寺開山・鉄文禪師の捉えた萬福寺の伽藍構成」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)』、平成2年10月)。
- 20) 中尾文雄訳：『黄檗清規』(昭和59年7月、黄檗宗務本院)のp.70。
- 21) 『前掲注14書』のp.65。この対聯は、実物および原本ともに福厳寺にある。
- 22) ここでは、福厳寺大雄宝殿を他の土間式本堂と別の一分類とするための資料として掲げたものである。さらに深く検討しない。黄檗派寺院におけるこの対聯文言と大雄宝殿の荘厳化についての考察は、別に論じる予定である。
- 23) 『禅学大辞典』下巻(昭和53年6月、大修館書店)のp.818。
- 24) 当文書の閲覧およびコピーなどにあたっては、本山萬福寺文華殿の林雪光先生はじめ職員の方にお世話になった。記して、謝意を表す。
- 25) 後述する宗永寺本堂(図-7)がこの土間式本堂に入ることになれば、土間式本堂は1例増えることになる。
- 26) 『柳川福厳寺歴史資料調査報告書—付。筑後の黄檗寺院—』(昭和58年3月、福岡県九州歴史資料館)。
- 27) 『福岡県の近世社寺建築—近世社寺建築緊急報告書—』(昭和59年3月、福岡県教育委員会)。
- 28) 『柳川藩史料集』(中島政治編、昭和56年3月、青潮社)。
- 29) 『旧柳川藩志』(柳川・山門・三池教育会編、昭和32年3月)。
- 30) 大槻幹郎・加藤正俊・林 雪光：『黄檗文化人名辞典』(昭和63年12月、思文閣)。

- 31) 横山秀哉：『禅の建築』（昭和42年3月，彰国社）のp.156。
- 32) 例えば，柳河藩では，安政7年（1860）の崇久寺本堂（柳川市東浦池147の1）などに現存している（『前掲注27書』のp.156）。
- 33) 秋篠文夫氏蔵文書中の延享元年（1744）5月『黄檗山塔頭別峯院方丈庫裡等建直し御願』の方丈が二列三間六室の方丈型本堂の図である。当図は，宇治市歴史資料室・岡井毅芳氏のご教示にて，昭和59年（1984）8月31日，コピーを拝見した。ご教示に対し，記して謝意を表す。
- 34) 萬福寺蔵『諸伽藍并塔頭繪圖』（天明八年＝1788）も同様な図である。当資料については，京都大学研究員・山野善郎氏にご教示になった。記して，謝意を表す。この萬福寺蔵の史料閲覧にあたっては，萬福寺文華殿・林雪光先生はじめ職員の清水ことえ，俣野浩子両氏にお世話になった。記して，謝意を表す。
- 35) 鳥越文邦：「独唱真機和尚略伝」（『黄檗文華』No.12，昭和49年10月）。
- 36) 上梁銘について筆者はいまだ実見していない。銘文については，現住職・花岩スエ子尼にご教示頂いた。また，大牟田市歴史資料館館長佐藤和四郎氏からもこの上梁銘に関するご教示を受けた。記して，謝意を表す。
- 37) この“座敷本堂”という呼び名がどの地方に，またどのような宗派に広がっているのか，不明である。この語は，慧日寺住職・鳥越文邦氏にご教示を受けた。記して，謝意を表す。

（1990年7月9日原稿受理，1991年1月28日採用決定）